No.27 2021. 6

放射線リスクコミュニケーション

# 相談員支援センターだより

## 災害の記録と記憶を未来へつなぐ
## 東日本大震災・原子力災害伝承館

東日本大震災・原子力災害伝承館は、地震、津波、それに続く世界的に例がない原子力災害の経験や教訓、復旧・復興の取り組み、さらには新たな挑戦を発信する施設として、令和２年９月 20 日に福島第一原子力発電所が立地する双葉町にオープンしました。福島県が収集してきた震災・原発事故関連資料の展示や導入シアターによる映像、福島第一原子力発電所の模型などを用いて、災害当時の状況を伝えています。

**――オープンから半年以上が経過し、現在では５万人を超える方が伝承館を訪れているとのことですが、来館者にはどのような方がいらっしゃいますか。**

老若男女問わず、様々な立場の方が足を運んでくださっています。考え方も人それぞれ異なりますが、共通していることは皆様が真剣に震災や原子力災害、廃炉等について考えてくださっているということです。

**――来館者の方とお話をする際に心がけていることはありますか。**

まずは相手の声に耳を傾け、私たちが何を求められているのかを探りながら、できる限りニーズにお応えできるように努めております。また、こちらから伝えていきたいことは積極的に伝えるように心がけており、例えば、県外からお越しいただいた方には、県内で力を入れて取り組んでいることや県外から応援していただきたいことなどをお伝えしています。

**――アテンドをされている中で、難しいと感じたことはありますか。**

皆様がそれぞれに様々な思いを持って当館にお越しくださっているため、中には不満を抱いていらっしゃる方もおり、分かり合うことに苦労したこともありました。また、自身の被災体験をお話しすることもありますが、深刻な被害を受けた方や辛い思いをされた方にとっては、話をすることで再び辛い気持ちにさせてしまう恐れがあるのではないかと考えることもありました。

**――対照的に嬉しく感じるのはどのような時ですか。**

再訪してくださる方が多く、オープン当初はなかなか理解していただけなかったことが徐々に理解していただけるようになってきたことや、来館

者の方のご意見をもとに展示物の変更を行った際に、それに気づいて喜んでいただけたことが嬉しかったです。また、お知り合いを連れて再訪してくださる方もおり、館内をご覧になりながら、お互いにどう思うか意見の交換をされている様子がうかがえました。時には来館者の方から感謝や労いの言葉をかけていただくこともあり、大変ありがたく思います。

**――伝承館では研修も実施されておりますが、これまでにどのような方が参加されていますか。**

様々な方にご参加いただいておりますが、中でも学校からの申込みが多いです。参加された生徒の皆さんからは、「何が起きたかを詳しく知ることができた」、「改めて災害の脅威を感じた。私たちが日本の将来を考えないといけないと思った」等の感想をいただきました。若い世代の皆さんはとても純粋で、学んだことを素直に吸収し、自ら考えることができている印象を受けます。

５月に若手職員３名が語り部としてデビューしましたが、若い職員が一生懸命伝えようとすることで、同世代の聞き手が共感できたり、心を動かされたりすることもあると思います。展示物だけでなく、人から伝えていくことが大切だと考えております。

**――今後の伝承館主催イベントの予定を教えてください。**

大小織り交ぜながら、月ごと、もしくは季節ごとに伝承館のコンセプトに合ったイベントを考えていきたいと思っております。復興に関連するものや、震災や原子力災害について考えることができるものなど、イベントから情報発信ができるようにしていきたいと思います。

**――研修やイベントの中でも様々なことを伝え、感じていただけるように工夫をされているのですね。**

ここから発信したことが広まり、再び地震や津波が発生した場合に役立てられることがあるのであれば、伝承館の存在意義を感じることができると思います。そのために私たちは少しでも知識を増やし、正確な情報をお伝えできるように努め、地元の方や被災した方の心に寄り添うような伝え方を心がけていきたいです。ご来館いただいた皆様の心を動かすことのできる伝承館を目指して、これからも引き続き、この未曽有の複合災害の教訓をできる限り分かりやすく伝えていきたいと思います。

**――災害の記憶を風化させないためにも、伝承館の取り組みや職員の皆さんの存在が大切であると感じました。本日はありがとうございました。**

## 相談員支援センター「支援ツール」公開のご案内

東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の発生から 10 年が経過しました。この間に避難指示が解除された区域もあり、帰還して生活を始めた方もいれば、現在も帰還するかどうか悩み、不安を抱えている方もおり、一人一人状況が異なっています。

事故直後は放射線に関する情報はわずかでしたが、現在ではインターネットで検索すると、どれを参考にすれば良いか迷ってしまうほどの情報であふれています。こうした状況の中で、放射線に関する相談を受ける自治体職員や相談員等の皆さんの対応がこれまで以上に困難になってきていると予想されることから、相談員支援センターでは、自治体職員や相談員等の方をはじめ、一般の方にとっても、放射線に関する情報を調べやすく整理した「支援ツール」を作成しました。

「支援ツール」は相談員支援センターホームペー

ジトップのバナーからアクセスすることができ、PC、ノートPC、タブレット、スマートフォンに対応しています。お気に入りサイトにご登録いただくとスムーズにアクセスができて便利です。現地での相談対応や急な説明を要する場面のほか、調べ物や学習、資料作りの参考としても役立つ内容を紹介しておりますので、是非ともご活用ください。

## 車座意見交換会の例
## 大熊町　車座意見交換会

大熊町保健福祉課より、住民の方が日常生活において抱いている放射線に関する疑問及び不安について整理する機会を設けたいとの要望を受け、４月23日に車座意見交換会を開催しました。

今回の会では、長崎大学から講師に高村昇教授、ファシリテーターに松永妃都美助教をお招きし、意見交換の中で挙がった疑問への回答や参加者への投げかけ等をしていただきました。参加者と高村先生の会話の中では次のようなやり取りがありました。「除染した畑や田んぼで採れたものから放射性セシウムは検出されるか」という疑問に対し、「客土を入れているのであれば検出されないと考える。放射性セシウムは土に付着しやすく地表面に留まるため、反転耕や地表面の土を取り除くことが除染として有効である。現在、大熊町周辺地域の畑で採れた野菜等からはほとんど放射性セシウムは検出されていない」との回答がありました。また、「山菜やキノコ等の山で採れるものが気になる」という声に対しては、「測定結果が多く集まり、放射性物質の濃度の傾向が分かってきている。例えばキノコでは、コウタケ等の腐葉土から生える種類は濃度が高く、

シイタケ等の原木から生える種類は比較的低い傾向がある。なお、基準値は１年間食べ続けたとしても年間１mSv を超えないように設定されており、１回の食事で基準値を超えたものを食べたからといってすぐに健康影響が出るわけではない」と説明がありました。

参加者からは食品に関する疑問が多く挙がり、特に関心が高い様子がうかがえました。高村先生や松永先生とお話をして、日頃疑問に思っていることや不安に感じていることについて知ることのできる良い機会となったのではないでしょうか。

## 住民セミナーの例
## いわき市立高久小学校 放射線教育

６月８日、いわき市立高久小学校の２、４、６年生を対象に放射線教育を行いました。講師に福島大学共生システム理工学類の河津賢澄客員教授をお迎えし、学年ごとに放射線について学習しました。

２年生と４年生の授業では、まず紙芝居で東日本大震災と福島第一原子力発電所事故のことや放射線の性質などを学びました。その後、霧箱で放射線の飛跡を観察しました。

６年生の授業では、はじめに河津先生から放射線についての講義を受けました。講義では、原子力発電所の事故が起きる前からずっと放射線が身の回りにあること、病院のレントゲン検査や空港の手荷物検査等、身近なところで放射線が利用されていることなどを学びました。次にグループに分かれて、講義で学んだ内容をもとに分かったことや気になったことについて話し合いをしました。

児童の皆さんは河津先生や紙芝居の読み手からの問いかけに、元気よく積極的に答えることができていました。また、河津先生のお話を聞いて一生懸命メモを取ったり、グループ活動の時に黙々とワークシートに自分の意見や感想を記入したりしている姿も見られました。この日の授業をきっかけに、児童の皆さんが少しでも放射線について関心を持ち、正しい知識を身に付けてもらうことができれば嬉しく思います。

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより №27

発行：**放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター**

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町１－６
いわきセンタービル5階、6階
フリーダイヤル：0120-478-100
FAX：0246-35-5158
E -mail：F-sodan@nsra.or.jp

本だよりは、環境省の令和３年度放射線健康管理・健康不安対策事業（福島県内における放射線に係る健康影響等に関するリスクコミュニケーション事業）に基づき、作成しています。